

アーク福音ミニストリー

# はこぶね

VOL. 56

2015.12.12

発行責任者:保坂 義秀 (アーク福音ミニストリー代表、聖書キリスト教会長老)

発行所:アーク福音出版 285-0923 千葉県印旛郡酒々井町東酒々井 3-3-34

TEL043-496-2727 Fax043-496-2729 E-mail : [ark-plan@cameo.plala.or.jp](mailto:ark-plan@cameo.plala.or.jp)

ホームページ URL: <http://ark-fukuin.com/>

ゆうちょ銀行  
記号 10560 番号 29284321  
アーク福音ミニストリー



## 降誕 準備の来臨と準備の人生

アイオーンキリスト教会

正木 弥 牧師

イエス・キリストは二千年前にこの世に來られた。それは単に一人の英雄一人の天才がきたのではなく、一人の哲人、一人の聖人が來たでもない。また、救世主と自称した「人間」が來たでもない。

一、実に、神の御子が人となって來てくださったのである。

マタイ福音書 1、2 章、ルカ福音書 1、2 章はその降誕の次第を書き記しているが、その意味は大きい。それは、

(1) 神のご計画により、キリストの來臨は、旧約聖書の少なくとも六十九か所において預言されていたことである。

(2) イエス・キリストは神の聖靈の働きて、通常起り得ない処女の妊娠・

出産という経路により生まれ來た方である、すなわち通常の人間の生殖作用によって生まれた者ではないことが記録されている。

(3) 福音書全般の記事には、そのイエス・キリストがその生涯で、人間ではなし得ないこと(不思議・奇蹟)をたくさんなされたことと記録されている。  
(4) イエス・キリストは単なる人間でなかつたことを最も明白に示す事實は、十字架で死んだままにしておかれず三日目に復活したことである。十字架の死はキリストの人性の証拠であり、復活はキリストの神性の証拠となつた。

仏教の開祖ガウタマ・シッタールタ(釈迦)もイスラーム教の開祖ムハンマドも、まさに、人間として生まれ、人間として死んだ。何らの奇蹟も行っていない。イエス・キリストはこれらの宗祖開祖とは根本的に違っている。

二、イエス・キリストはどのような救い主として來てくださったのか。

人が地上に増え始めたとき、神の子ら(神様を信じて生きる人々)も人の娘たち(ふつうの人々)の欲望中心の生活と一体化し、これと同じような生き方になじんでいったので、神は人が

肉にすぎないとして、人の寿命の限界を百二十年にされたのである。その後のどの国でも(現代でも)最長の寿命がほぼこれを超えることがないのは、驚くべきことである。

それと同時に、神は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になって、人を一旦地の面から消し去られた。これが、ノアの大洪水であった。しかし、洪水後に神は、「すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない。・・・地を滅ぼすようなことはない。」と約束された。

三、この約束は今も守られている。大洪水で地全体が滅ぼされるようなことはない。しかし、他方で、いつの時代も地上に人の悪が増大し、その計ることがいつも悪いことに傾いている。

(それは人類の始祖の罪を引き継いでいるためであらう。)これでは人は幸福になれない。また、その人生は悪と罪の汚れに染まれているので、神の国・天国に迎え入れられることがない。真の意味で不幸である。

四、そこで神は、長い救済の計画を立てになった。まず、モーセを通して

イスラエルの民に律法をお与えになった。そして言われた。「あなたがたは、わたしのおきてとわたしの定めを守りなさい。それを行う人は、それによつて生きる。」(レビ記一八の五)。

これが旧約(古い約束)であり、長い間イスラエルの民はこれを守ろうと努めたが、失敗を繰り返した。そこで神は預言者を遣わし、何度も警告されたが、結局、守りきれなかった。

五、このような経緯をふまえて、神はかねての計画どおり、御子イエス・キリストによる救いの計画を実行に移すことにされた。その救いは前後二回にわたる来臨を通してであった。

六、まず、初臨のはじめ、パックス・ローマーナの初代皇帝アウグストゥスの時代、キリストはユダヤの地ベツレヘムでご降誕されたのである。

七、ところが、そのイエス・キリストの生涯は、人々の予想に反し、十字架の刑で死ぬというものであった。これは、神の怒りを看める犠牲の供え物になったもので、それにより人類の罪の贖いを成し遂げてくださったのだ。罪・悪は罰せられるを得ないという「義

の要求と、そのような存在を憐れんで救つてやろうという「愛」の計らい、その背反する二律の要求を神は驚くべき方法で充たしてくださったというわけだ。

この刑と死が自分の罪の代わりだと信じる者、簡単に言えば、キリストを救い主と信じる者にはその罪を赦し、神の子としてくださるという新しい約束(新約)なのだ。それは、律法の行いによつて神に受け入れられるとの従来(旧約)の道よりもはるかにやさしい道(恵みの道)である。

八、しかし、この救いは心霊上のもの、まだ具体化してない原理的なもので、いわば、半分の救いである。この救いを受けた人はその後も小さい罪や心の罪を何度も犯す。また、病氣もする、事故にも遭う。家庭や職場でときには教会ですら争いが絶えない。いろいろな苦難が来て、悩む、悲しむ。憎しみやねたみにも捉えられる。そして何よりも「死」を避けることができない。

九、世界を広く眺めてみるに、イエスを信じる信仰により心霊上で救われている人も、現象面では、悲惨に満ちて生きている場合が多い。その生きて

いる地方が戦乱や飢餓、貧困、圧政あるいは自然災害や伝染病の常襲地帯で、呻くほかないとき、さらには救われて後、周囲の異教徒らから迫害にさらされている場合もある。さまざまに現実を見ると胸が痛む。

先進国といわれる地域で救われた信徒も、絶えざる競争や厳しい雇用環境の中で苦しみ、ときには社会を覆う不倫や欲望至上主義、さらには暴力やいじめ、ハラスメント、そのほか様々な善悪の社会で苦しんでいる。信じて救われてすべてハッピーという状況ではない。むしろ、キリストから「あなた方は世にあっては艱難がありま」と覚悟を求められている。

十、一般に、人間の生まれは、(人間的に言えば)実に、不公平である。即ち、人種、背の高さや体力、病氣その他の障害の有無、容貌、知的能力、弁舌、性格、家庭の経済力、地位、家族環境、またその生きる地方が平和な地域か、戦乱常ない地域か、安全・衛生な社会か伝染病などの多い後進地域か、教育が行き届いた地域なのかそうでない地域なのかなど、それぞれ恵まれて生まれてきた人とそうでない人がおり、そのどれ一つですら、その後

の努力によつても心がけによつても、乗り越え、克服することは容易でないのが現実である。

十一、その外、社会の不条理、不合理など、その人の責任でなくて厳しい成長環境・人生行路を歩んで行かなければならない人もいる。その結果、いわゆる恵まれない、下積み的人生になり、不利をこうむったり、さげすまれたり、いじめられたり、ガマンするほかない人生の人が大勢いる。

十二、そういう人々が仮にキリストに出会って信仰者になったにしても、その救いはまずは心霊面での救い、原理上の救いであつて、ただちに、具体的に境遇を改善するものではない。もちろん信仰から来る良い生き方、良い心がけが人間関係を良くするなどにより状況をうまく改善することはある。それゆえ、住みやすくはなるかも知れない。しかし、それが現象面で客観的で具体的な改善とまでは行かないこともある。

そのような救いは、「不信仰者から見ると」心理的な救いであつて、気休めの救いだ、人生をかけて追い求めるに値しない、とか、仏教の悟りと大差

ないと言われるかも知れない。罪が赦されなくても、気晴らしで忘れたい、良心を抑えて、うまく立ち回って悪事してもいい。現に社会に「ロマン」という人のように生きて少しでも具体的な境遇をよくするよう努力する方がいい、と言われかねない。

十三、「パウロと同じような口調で言えば」間違っではない。神様は犯した罪をそのまましておかれることとはない。

すべての人は造られたものとしてその目的にかなうように生きてか、罪・汚れに染まっていけないか、それが問われ、裁かれる。正義の観点から報いがなされる。どの人もその生涯でなしたこと、しなかったことの責任が問われ、隠れた善事や忍耐が評価される。それ故、どの人ももっとも真剣に生きなければならぬ。誰も最後の審判を免れることはできない。

ところが、このとき、キリスト信仰者は、「罪人であっても」キリストの十字架を信じる信仰により、罪を赦されているので、義(ただしい者として扱われ、罰を免れるという。この点にこそ、「初臨」特に十字架の犠牲と罪の赦しの最大の意味・効果がある。

十四、もう一つ、特に強調すべきは、神様は半分の救いで済ますこととはされない、ということだ。最後の審判を通り過ぎた人(即ち、罪を赦された人)は完全な救い、具体的な救いへと導かれるのだ。人類を永遠にそのまま心霊上の救いだけにしておくこととはない。そして、不公平、不条理、不合理で悲惨な世界をそのまま続けるわけではない。神様の計画は、完全な救い、救いの具体化、真の正義が実現することである。つまり、原理は具体化せずには終わらない。心霊の救いはからだの救い、環境の救い、世界の救いにまで至らざるを得ない。そのことが約束される、予定されている。神の熱心がこれを成し遂げるのだ。それはイエス・キリストの再臨のときに実現する。

十五、そのとき、からだが復活させられる。そのからだは完全なからだである。そのからだはもはや死がない。病気もケガもない。痛みも苦しみもなく。悩みも心配も焦りも恐れも争いも妬みも怒りもなくなるだろう。すべて悲しいこと、つらいもの、厭うべきもの、にがいもの、呪わしいものが一切なくなり、涙を流す必要がなくなる。暑さも寒さも、飢えも渴きもない。災

害も災厄もない。圧政も不正な統治もなくなる。貧しさも不足もない。豊かさにも満たされる。争いも戦争もない。襲撃を受けることも略奪されることも非難されることもない。悪口を言われることも罵倒されることも嘲られることも蔑まれることもない。喧嘩もいやがらせもいさかきもない。悲鳴をあげる必要もない。心の中も、体の状態も外的環境も、他者との関係も、平和で愛にあふれ、喜びと嬉しさで楽しさに満ち、快適で気持ち良さのうちに生きる。代々の聖徒らに会い、喜びの宴を共にする。キリストがともにいてくださるからである。

十六、このように完全な救いが具体化するだろう。心理的だけでなく、客観的・外的に実現する。しかもそれらは、一時的で過ぎ去るものではなく、永遠に続くというものである。永遠のいのちはいついっものであろう。これが予定され、約束され、再臨の暁に実現する。真の正義、真の救いが実現する。これを神は計画し、約束してくださっているのだ。

我々はそれを待ち望んでいる。初臨でなされたキリストの十字架の贖いを信じている人、即ち、原理的に救い

を受けている人が、あらゆる面での真の救い、完全な救いをいただくのである。

十七、初臨だけでは、人の真の完全な幸福は実現しない。しかし、初臨がなければ再臨もない。初臨を踏まえた再臨によって完全に救われるのだ。初臨で心霊上、原理的に救われた者が、いずれ再臨で、最後の審判を免れ、真の救い、具体化した救い、完全な救いにあずかるのである。

初臨がなければ天国・永遠のいのちがない。初臨は再臨に先行し、再臨を準備している。初臨は再臨の準備である。そして、降誕は初臨の初めであるとともに、遠く再臨の出発点でもある。「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」イエスが宣教の初めにこのように言われた真の意味は、「再臨」特に天国・永遠のいのちの実現まで見通したプログラムが始まったということであろう。

十八、一人一人、初臨後の、再臨までの間のある時を生きている。いや、生かされている。初臨後の再臨までの間、八十年か九十年を、それがすべてであるかのように生きている。

十九、しかし、前述のとおり、世界でも日本でも、貧しさとか偏見とか病苦とかで、見下げられたり、文化はつる境遇に生きている人がたくさんいる。生まれつきの何か、体力や容姿、知的能力や他人には理解できない何かで苦しんでいる人が多い。だから、この世即ち初臨から再臨までの間のいのちで見れば、それは大変不公平であり、直し難い。惨めであり、考えるだけでも苦しくなる。もし、人生が競争に勝つこと、成功を求めることであるならばこの世は実に不可解だ。もしこの世が楽しむところであるなら、不合理きわまりない。

二十、しかし、そもそも、人生は、競争で勝利したり、何かに成功したり、他人と比較していい気持ちになるために与えられているのではない。よい地位に登り、褒められる仕事をし、うらやましがられる生活をするのが目的ではない。そこで精一杯欲望を充足し、あるいは、楽しむを満喫するところでもない。

実に、人生の目的は神の愛の現れである。キリストの救いにあずかること、あずかって神の子にされること、そして、天国・永遠のいのちに入られる

ことである。そのため、初臨後の、再臨前に生きる存在として、その与えられた人生のうち、初臨でなされたキリストの十字架の贖いを信じることだ。それが肝心かなめのこと、不可欠の重要事である。端的にいえば、それさえできれば他のことは、その人生でできてもできなくても、どうでもいいのである。この世で褒められなくても、好きなことができなくても、勝利や成功がなくてもいい。それらは、あつてよし、なくて構わないのである。

二十一、その生涯を、貧しさの中で、あるいはハンディの中で苦しむつつ、あるいは下積みでさげすまれて生きてても、十字架を信じ、原理的に救いを得ているなら、その人生は目的を達成しているのである。多くのことをしなくてもよいのだ。ただ、その貧しい、苦しい人生で、キリストを信じて、救われるための資格を得ておればいいのだ。それさえできておれば、いずれ再臨の暁に、完全な救い真の幸福にあずかるのだ。

逆に、豊かな才能や良い境遇が与えられて生まれた者は多くの有益なことをなす責任があることを知らねばならない。それを思わず、自分の楽し

みや、自分の誇りのために生きたり、高慢になったりするのとは間違っている。神様から与えられた賜物の責任を問われるだろう。

二十二、だから、人は、この世の人生即ち初臨後の再臨までの人生だけを考えていたのでは得心できない。勇気をもって、希望をもって生きることができない。この世の人生は、再臨後の人生（来生）の準備のときである。準備のときは、よく準備すること、それが最も大事な仕事である。この世の人生でキリストを信じて、原理的、心靈的救いを得るといふ意味の準備をしておこう！

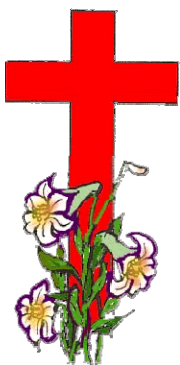
二十三、初臨の十字架がなければ罪の赦しがなく、従って、再臨時にその冒頭にある最後の審判を通り過ぎることができない。よって、天国・永遠のいのちにも辿り着くことができない。救いは、必ず、初臨、なかならず十字架を通らなければならぬ。しかし、救いは十字架にとどまるものではない。真の救いはこの世において完成するものではないからである。救いはこの世において始まるが、（終末に生き残っている人を除いて）来世において

実現・完成するからである。天国・永遠のいのちは来世において、現実化し、見て、触れて、浸ることが出来るものである。

二十四、人の人生はこの世のためにあるのではない。この世で楽しんで生きるためにあるのではない。この世は、楽しんで、つづくても、経過するところ。過ぎてゆくところ。しかし、その過程は、キリストを信じて天国・永遠のいのちという真の救いへの準備をするときである。この「準備」という一点でまことに大事なとき、ところである。人生の最重要事はそこにある。キリストが初臨でそれを用意してくれている。

二十五、キリストは、再臨で、人の子としてご自身の国に迎え入れ、完全で真の救いにあずからせるため、二千年前に降誕し、十字架で死んでくださった。

この降誕と十字架に感謝し、喜ぼう！



## キリシタンの世紀を生きた人々⑨

平山 公司牧師

キリシタン史愛好家

「愛する者たちよ。あなたがたにお勧めします。旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。異邦人の中にあつて、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行いを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。」

I. ペテロ二章十〜十二節

## 最初のキリシタン大名大村純忠(一)

今回から、長崎を開港し、キリシタンの町を作り、日本最初のキリシタン大名として「小ローマ長崎」の基礎を築いた大村丹後守純忠(一五三三—一五八七年、靈名バルトロメオ)の波乱に満ちた生涯を取り上げ、共に学びたいと思います。

本論に入る前に、その背景となる長崎地域の成り立ちや武士団の推移についてご紹介したいと思います。

長崎県に属する現在の地域は、古来、

日本と朝鮮半島・中国大陸とを結ぶ交通の要所でありました。例えば日本から中国に派遣された遣隋使船や遣唐使船などは、長崎県下の島々を寄港しており、中国大陸への公式ルートでしたし、中世に入ると倭寇(わこく)と呼ばれる海賊、密貿易商人の根拠地と見なされる時代もあつたのです。

従つて、この地域の住民には海を隔てた朝鮮・中国などの異民族や異文化と交流する機会が多くあり、そのような歴史的推移から、進取の気性や国際的な感覚が豊かに養われて行きました。



一五四三年、南海に浮かぶ種子島にポルトガル人が来航したのを機に、ポルトガル船は頻繁に九州東南部の薩摩・日向・豊後に寄港するようになり

ました。九州西部の肥前への来航は少し遅れ、一五五〇年に平戸に入港したのが最初とされています。

当時の平戸地方の大名は松浦隆信(まつらたかのぶ)で、ポルトガル船の来航には、彼の庇護下にあつて平戸を根拠にしていた海賊(倭寇)の中国人王直(おうちよく)が深く関わっていたようです。

同年六月、鹿児島で布教していた宣教師フランシスコ・ザビエルはポルトガル船来航の報を聞き平戸を訪れました。その後彼は日本全土にキリスト教を布教するためには天皇の許可が必要と考へて上洛を決意、その途次、再度平戸に立ち寄り二カ月滞在しました。領主隆信は、ポルトガル船の入港を継続するためには、ポルトガル船員が尊敬してやまないザビエルら宣教師の好意をも得ておく必要があると考へて、彼らを厚遇し、平戸における布教許可を与えました。

ザビエルの平戸滞在中に洗礼を受けた領民は二百人にも及びました。彼は上洛に当たり、信徒の信仰を守るため、コスメ・デ・トーレス神父を平戸に残し、後事を託したのです。

かくして、長崎県下のキリスト教布教はまず平戸から始まったのです。

大村純忠の実家の有馬家は大村家と共に、平将門(まさかど)の承平・天慶の乱(しょうへい・てんぎょう)のらん、九三五(九四一)に加わり官軍に敗死した藤原純友(すみとも)の子孫とする説もありますが、肥前国の在地領主だったとする説が有力です。

南北朝時代には、有馬氏は大村氏と同様南朝方につき、次第に勢力を拡げて行きます。

戦国時代になると肥前各地で合戦が繰り返されましたが、在地領主層からも台頭する者が現れました。有馬氏は周囲の諸氏を抑えて次第に台頭し、有馬賢純(まさすみ)は、將軍義晴から晴純(はるすみ)という名と修理大夫の役職を受けました。同じ頃、大村純前(すみあき)は家督相続の御礼言上のため上洛しております。室町幕府の権力は衰えたとはいえ、この当時はまだ地方の大名・国人にとって権威と利用価値が残っていたのです。

有馬家と大村家の関係は家紋を同じくする同根の地方豪族らしく、嫡流は大村家で本家、有馬家が庶流とされていたようです。両家は代々通婚を繰り返し、密接な関係にあり、利害関係も複雑に交錯していました。

しかし、戦国時代に入ると大村氏の

勢力は急速に衰え、一方の有馬家は次第に勢力を伸ばし、領土を拡大して、

いつの間にか両者の立場は逆転しました。一四七四から一四八〇年にかけての期間に、大村純伊（すみまさ）は有馬貴純（たかすみ、大村純忠の実曾祖父）によって大村から追放され、これを契機に大村氏は有馬氏の支配下に置かれることとなりました。

有馬晴純の次男として生まれた純忠は、このような背景をもって幼くして大村家の養子となり、一七歳で相続します。養父の大村純前（すみさき）は実母の叔父に当たり、叔母の夫でもありました。このような近親同志の縁組はこの時代には珍しいことではありませんが、大村家には、ひとりの庶子がいきました。後に純忠の生涯のライバルとなる後藤貴明（たかあきら）です。

彼は純忠が大村家に迎えられる前に、武雄の後藤純明（すみあきら）の養子とされ、後藤家を相続したのです。これら一連の縁組には全て有馬晴純の政略的な意図が働いたものと思われませんが、反発する者が続出しました。彼らは貴明に従い大村家を去り、その数は十八氏にも及びました。従って純忠の大村家相続時の地位は、非常に不

安定なものでした。

親たちが決めた事ではあっても、庶子とは言え実子の貴明を差し置いての大村家の相続には、純忠自身も負い目を感じていたようです。またその故に、家臣が二派に分かれ対立抗争を繰り返す始末となり、更には周囲を強豪大名に囲まれているため、常に攻撃を受け脅かされる状態にありました。自ら望んで招いた境遇ではなかったとしても、その時代に生きるためには数々の不条理を呑み込んで従わねばならなかった事も多かったのではないかと、純忠の人生と信仰から思いやられます。

冒頭のペテロの言葉は、この地上では旅人であり、寄留者であるクリスチャンがいかに生きるべきか、何を為すべきかを教えています。主イエスを信じているが故に、誤解を招いたり、非難されることもある、それでもクリスチャンはそれらの苦難に耐え、神を証しする立派な行いをするようにと教え励ましているのです。

ペテロの語る言葉は、異邦人社会である日本に生きていく私たちに重要な事を教えます。大村純忠らが生きた時代から現代にいたるまで、日本はクリスチャンにとって決して暮らしや

すい環境ではありません。今でもクリスチャンがパーセントにも満たない国だからこそ、私たちは立派に生きなければなりません。

どんなに誤解され、どんなに批判されたとしても、主イエスのように黙々と「苦難の僕」の道を歩まねばならないのです。それは、彼らが、「おとすれの日（主イエスの再臨の日）」に神をほめたたえるようになるためなのです。

純忠も同じような思いで、その時代を生きたのではないのでしょうか。次号から最初のキリシタン大名として歴史に名を残した大村純忠の人生を辿ってみたいと思います。（続く）



### 神さまのテスト

大家 典子（教会奉仕者）

ただし、わたしのしもべカレブは、ほかの者と違った心を持っていて、わたしに従い通したので、わたしは彼が行って来た地に導き入れる。彼の子孫はその地を所有するようになる。

民数記一四章二四節

どこまで自分を捨て、神さまに従うことができるかテストされているなと思うことがときどきあります。過去を振り返って、数あるその中でも、最大級だったなとも思える神さまからのテストがあります。そのことをお話しします。

一九九七年の年明け、夫の脳腫瘍の再々発の手術後の闘病生活も二年二月ほどになったころでしたが、突然担当医から余命三カ月と宣告されました。その頃は、手術直後の脳梗塞による左半身麻痺で、寝たきりの状態は変わらないまま、さらに話すことも、食べることもできなくなり、ついには鼻からチューブにより栄養を摂取するようになってしまいました。

意識もだんだんはつきりしないことが多くなっていましたので、病院に行くたびにそんな姿を見るのは、ほんとうに辛く、もういいですから、早く天国に夫を連れて行ってくださいと願うようになりました。私自身が、夫の姿を見るのが限界になってきていました。早く地上での苦しみから解放してあげてくださいと神さまに心の中で言っていました。

夫の体も限界に近づいていましたが、私も限界に近かったのです。すっ

と主が与えてくださったさるみことばにすがり、耐えてきた二年余りでしたが、最も精神的にきつくなっているときに、夫の余命三ヶ月の宣告を受け、とうすればいいのかわからず、主に聞きました。

すると聖書のどこを読んでも、忍耐の文字が目につく。また祈りの中で、神さまは私に忍耐しなさいと言われていたのがわかりました。しかし私は、神さまに反発しました。もう限界だと言いつつ、さらに忍耐しろと言われてるのですか！

私には訳が分かりませんでした。ずっと忍耐してきたのに、まだ忍耐しなさいと言わねるのですかという思いでした。私はもっと違う言葉を期待していたんだと思います。

自分で言うのも何ですが、ずっと神さまが言われることには、素直に従ってきたほうだったと思います。しかしこの時ばかりは、天のお父さんの言われることに素直には素直に従えませんでした。反論していました。

そしてしばらく時間を置いてから、とても従えない思いでしたが、敢えて自分の感情を横に置いて神さまのみことばに従おうと決めたのです。それはまるで重い鉄のドラムの取っ手を持

ち、足を踏ん張って開けるような感覚でした。

訳がわからないけれど、納得がいかないけれど、限界だけれど、神さまが言われるのだから従う、そう決断することのチャレンジでした。自分を明け渡して従う、徹底的に神さまに従うとは、こういうことなのだと思います。

しかしその前に、神さまに心の底から自分の感情をぶつけて「ずっと忍耐してきたのに、さらに忍耐するんですか」と言えたのも良かったし、でもあなたが「忍耐しなさい」と言われるのだから従いますと言えたのも良かったですと思うのです。

私は、この神さまとのやりとりによって、神さまとの距離が近くなったのがわかりました。しっかりと天のお父さんと向き合うことができたからです。そしてもうひとつの変化は、忍耐力が増したことです。

この体験以来、簡単にギブアップしなくなりました。さじを投げたくなるような時でも、以前より、御心が分かるまで、くっついていようと思えるようになりました。そして主に従うことに心を向けられるようになったのです。

ところで、イエスさまは、十字架の

死に至るまで従順でした。

「ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」

(ピリピ二章七節―八節)

このみことばは、生きる上での大きな指針となります。

天のお父さんは、私を子として扱ってくださっているゆえに、訓練は続きます。成長のためのテストは続きます。しかしテストにパスしたときは、良くやったとても喜んでくださっているのがわかります。そして必ず信じがたい祝福が用意されているのです。ちょうどカレブがそうだったように。

カレブに見習いたいと思います。「ただし、わたしのしもべカレブは、ほかの者と違った心を持っていて、わたしに従い通したので、わたしは彼が行って来た地に導き入れる。彼の子孫はその地を所有するようになる。」

神のみちびきにより

—私の信仰履歴・十七—

植草 榮一牧師

あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるならその人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっとあたえられます。

ヤコブの手紙一章五節

私の手元に1967年に造った一冊のファイルがある。前年、十月の半ばから突然に始まった家庭集会では礼拝の順序を毎回ノートに書き、司会者や証し者、奨励者は順番を決めて全員でしていたが週報を造るまでにはいかなかった。

以前の教会では牧師がガリ版謄写版で作っていたが信徒はしていなかった。新年の初めからノートの記録を基に手書きの「月報」を作り始めた。記録を皆に見て貰うのである。

先週はどの様に礼拝を捧げたか欠席した人にも報告、その月の奉仕予定表や前月の礼拝報告、献金の状況など知らせる必要があった。これらのお知らせを勤めの合間を縫って作業し、月初めには皆の手元に渡る様に頑張った。



イースターなど特別な日には礼拝プログラムを別刷りしたが、何しろ手書きの上に字が下手で見栄えが悪い。そんな折にワープロ（パーソナル・ワード・プロセッサ）が売り出されたので買い求め、月報造りから始めた。簡単には行かず、文字の配列を覚えるのに大変な苦労をしたのを今でも良く覚えている。

その上、変換にも戸惑い一ページ造るのにもかなりの時間を要した。歳を取ってからの手習いは大変で、仕事を終った後の夜の作業は困難を極めた。だから出来上がった時の喜びはこと更に、次に繋がる力にもなった。

この年にもう一つ喜ばしい出来事があった。それは、東京の集会に参加した折に、私たちの集会の様子を大勢の人の前で話したところ、同情された一人の牧師が協力を申し出てくれたことである。

その方は、私たちが以前所属していたホーリネス教団に属していて、その頃は川崎の教会で副牧師をしておられた。きつと牧師のいない群れが羊飼いのいない羊の如く、さまよう様相に見えたのだろう。五月の最後の日曜日、早速、その方を招いて礼拝を持った。久しぶりに信徒でない牧師のメッセ

ージを聞いて、今までの約半年間、自分たちがしてきた礼拝での奨励は何だったのかとの思いに駆られた。

しかし、聖書を本格的に学ぼうと思いは始めるのはまだまだで、それから何年も後のことになった。仕事は相変わらず忙しく身体が幾つあっても足りない感じで、勉強と仕事の両立は難しくすぎた。他の人たちも同じで、奉仕は今まで通りとしても、時々、外から牧師を招いて行くことに、役員も皆も意見の一致を得たので、1961年は、毎月毎に二人の牧師を招いて、礼拝を守っていった。

(続く)



### 戦争をするのは・・・(4)

保坂 恭子牧師

あなたがたは、わたしを恐れないのか。  
——主の御告げ——それとも、わたしの前でおののかないのか。

エレミヤ書五章二二節

無辜(むご)の民という言葉がある。新明解には「たまたまそこに、その時代に生まれ合わせたために戦火・殺傷事件などのとばっちりを受けて虐げられ迷惑する住民たち」と定義している。無辜とは罪を犯していないという意味だが、ロマ書の「義人はいない。一人もない」とは別である。

「はこぶね」56号の編集集中にパリで大きなテロが起こり、ロシア機の墜落事故がテロであったとわかり、フランス、ロシア両軍のイスラミックスポートへの報復空爆が激しくなった。テロはそちこちで起き、ニューヨークは狙われて警戒態勢であるらしい。

揚げ句ロシアの爆撃機がトルコの領空侵犯か否かで撃墜されたとか、敵味方の別も分からないほど空爆は入り乱れ、フランスの大統領は現状を戦争であると宣言した。逃げ出す人々とともにテロリストが紛れ込む恐れが大いにと、各国は難民を入れないことの正当性を主張し始めた。

あの空爆の下で身を縮めている多くの無辜の民の死、数えてもらえない犠牲。受け入れ先の当てもなく海を渡り山や畑の間をひたすら歩く人々の列。子どもがいる、父親が母親を抱きしめ腕に抱え僅かな荷物を持ちすべ

てを失って。七十年前カラフトで満州で韓半島で見られたように。戦争の記憶はこうして紡ぎ続けられていく。

私たちの国はどこへ行くのか。世界中に拡散しつつある戦禍なら我らも乗り遅れまいとでもいうのだろうか。新聞紙上にはこんな短歌があった。  
「軍歴を負ひし我らの消えしのち決していくさ起こすなよこの国」  
「わが首相空母に乗ってはしゃいでる兵隊」こつこつしたきか彼は

服役中の一兄が「ずっと暴力の中で生きてきたから、ついやられないように力を持つと考えてしまおう」と前号の感想をくれた。「剣を取る者はみな剣で滅びます。」とイエスはおっしゃった。やる者はいずれやられる。朝日川柳の秀句には「やるやられやられたらやるやられやる」・・・我らみな神さまの御前で畏れおのこのう。



**編集後記** クリスマスおめでとうござい  
ます。主に感謝！◎巻頭の正木先生は香川県高松市在住、小説を書かれ出版も手がけられます。文字でする伝道の意義は何度も読めて心に届くこと。用いられますように◎大家姉の東京バプテスト教会、第四以外の毎週土曜日午後M・J・カフェ、クリスマス・コンサートにお訪ねください。◎ホームページ若者伝道お祈り感謝Y・H記